



米国「アトランタ・ジャーナル」紙記者

Richard B. Matthews  
リチャード・マッシュズさん  
(論説委員)

■プロフィール  
1945年生れ。1986—87年フルブライト留学生として慶応大学に籍を置き、「日本社会の権威について」を研究。夫人が日本生れであるなど、日本との関わりは深く、地元ジョージア州アトランタで「日本語を話そう会」を主宰。日本の中央省庁や経済人にも幅広い友人を持ち、中央公論等日本の出版物にも記事を掲載している。

マッシュズ氏は、大の知日家。毎年のように取材を兼ねて来日しています。今回は、植木町とジョージア州アトランタ近郊ローム市との姉妹交流の橋渡し役として、三年ぶりの来熊。視点を変えれば考え方も変わる、多様な価値観を認め合うためにも国際交流は必要、と話す氏から出てきた言葉が「ジョウキョウシユギ」。日本人の特質を見抜いた氏が語る「日米比較精神論」について伺いました。

## 「ジョウキョウシユギ」とは、中央集権的な日本社会の精神状態を名付けたものです。

日本中を旅行していて、私はしばしば、住むとしたら熊本のような所がないなあと思います。ゆったりした家に住んで、大自然にも容易に親しむことができるし、何といっても生活のリズムがとても快適に思えます。だから、なぜ多くの若者がこのように「快適な」故郷を捨てて、「大都会」に出ていってしまいい、結果として地方経済が伸び悩んでいるのかどうしても納得できずにいました。

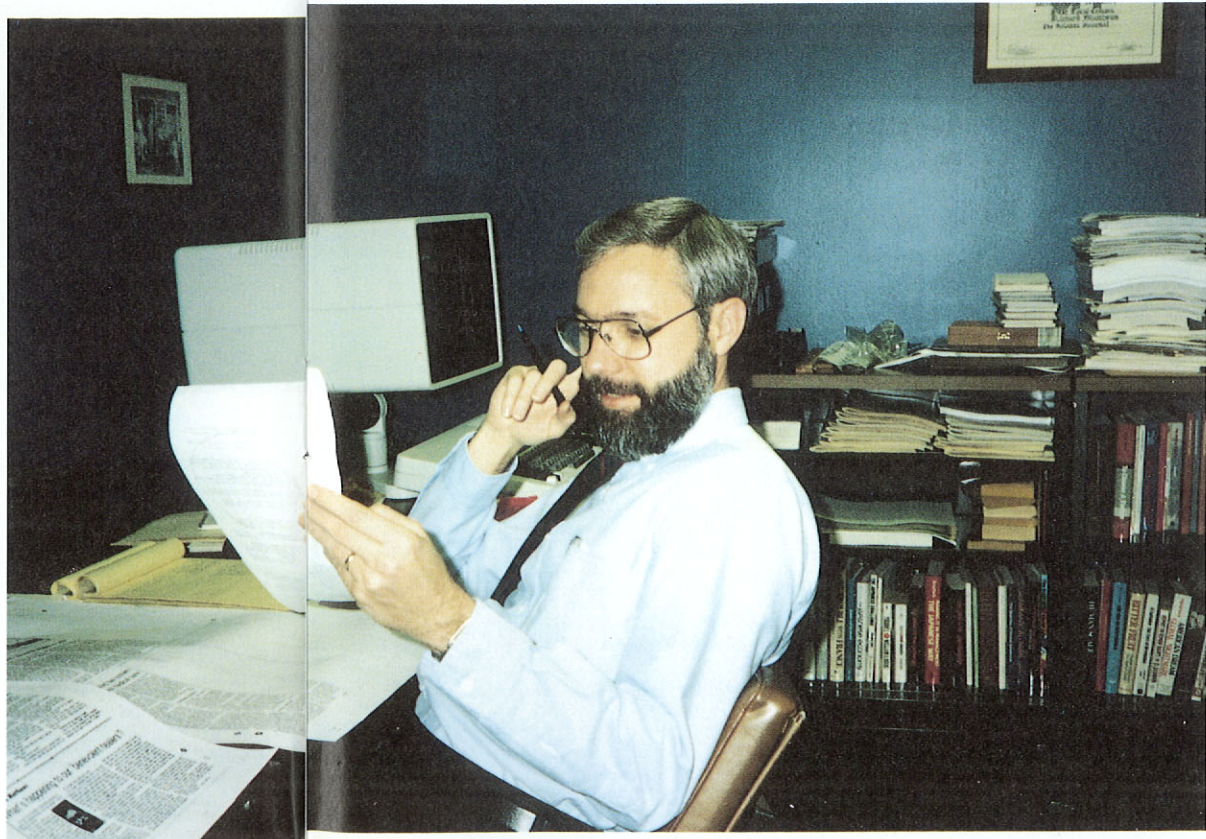
業界という経済的要素よりも「上京主義」とでも呼ぶべき観念が大きく作用しているのではないかと考えるようになりしました。「上京主義」とは、人間や産業や繁栄を地方から奪い取って、東京や大阪などの大都市へ集めてしまおうという日本社会の精神状態を私自身が名付けたものです。

この春熊本を訪れ、いろいろな話を聞いていくうちに、どうやらそれには農

日本が中央集権的な「上京主義」の国だとすれば、アメリカは常に拡張したいと願う「フロンティア・スピリット」の国だと言えるでしょう。

です。必然的に、そこには人より上にランクされたいと考える人々が群がります。その結果、日本中の人口の四分の一が首都圏に集中するという現象が起こるのではないのでしょうか。

アメリカは、建国以来ずっと西に向かつて広がってきました。中央から離れる道を選んでいるのです。人々は、自分の手で土地を開拓し、仲間と共に郷土を築き上げてきました。そうしたふるさとへの愛情と誇りに、アメリカ人は地元に残り、そこに健全な経済地域を築こうとするのです。



地方の産業化には、外国企業もかなり貢献しています。

アトランタのある南部ジョージア州は、今やカリフォルニア州に次いで全米二番目に日本企業が多数州です。日本のビジネス界が、自国ではそうでもないのに、アメリカでは地方に居心地の良さを感じているのでしょうか。

さて、今まで述べてきたような「観念の違い」に基づく私の仮定は正しいのでしょうか？もしそうだとすると日本、とりわけ熊本はどみなるのでしょうか？

繰り返しますが、熊本は、大都市よりもずっと快適で豊かな生活を提供できる可能性を秘めています。装飾古墳館や田原坂公園などは東京のどんな観光地よりもずっと興味深く感じましたし、阿蘇では思い切り自然を満喫することができました。

すつかり失われてしまった真の人情味が熊本にはあります。

一アメリカ人にとって、十分に人々を地元に残らせ、さらに多くの人々を大都会から引き寄せるに値するように見えるこれらいくつもの利点。しかし大企業が、そして人々が、これらも「上京主義」に振り回され続けるとすれば……

企業の目を、そして人々の目を、大都会から地方に向け直すには、テクノポリスを建設したり、様々な優遇措置を与えて企業を誘致したりするのももちろん大事でしょう。しかし、それに加えて「何か」が必要なのです。

その「何か」は、それぞれの地域の人々が自ら見つけなければならぬものなのです。

いずれにしても、それは易しいことではないでしょう。日本の「上京主義」は今に始まったものではないのですから。最後にありますが、私は、様々な出会いや発見のあった熊本に来て本当に良かったと思っています。熊本がいつまでも活気に満ちた、魅力的な素晴らしいところであり続けるよう心から望んでいます。



業界という経済的要素よりも「上京主義」とでも呼ぶべき観念が大きく作用しているのではないかと考えるようになりしました。「上京主義」とは、人間や産業や繁栄を地方から奪い取って、東京や大阪などの大都市へ集めてしまおうという日本社会の精神状態を私自身が名付けたものです。

もちろん日本人にも「郷土愛」という故郷への強い愛情があるのは私もよく知っています。ただ、多くの人が、「ふるさと」を遠く離れた大都会で生活しながら「郷土愛」を抱き続けているようなのです。

総体的に見れば、アメリカでも地方経済はやはり都市経済にはかないません。それでも、各地に点在する大企業がそれらを取り巻く中小企業と共に国内のあちこちで経済の中心地を形成していますから、限られた数の巨大都市が地方のすべての労働力を吸い取ってしまうようなことはなく、どの地域もどの州も地元の人々による経済成長の見込みが期待できるのです。